

## 三浦綾子「氷点」

(朝日新聞社 大阪本社創立 85 周年、東京本社 75 周年記念企画)

1 千万円の賞金

昭和 39 年 7 月 10 日の朝日新聞の朝刊

「キサクな雑貨店の主婦」「深夜、書き続けて一年」という大見出し

本作品の主題：「人間の原罪」「痛い!」「痛みの感覚」

「汝の敵を愛すべし」の問題も？

続氷点のテーマは「罪のゆるし」

辻口啓造 (辻口病院院長)

9 月 26 日、洞爺丸遭難(学会のため連絡船に乗る。台風、函館からの連絡船座礁、沈没)。  
啓造、九死に一生を得る。

宣教師の犠牲「救命具の紐が切れた女に、自分の救命具を与えた」(ワタシノヲアゲマス)

辻口夏枝 (妻) 津川教授 (内科の神様) の娘

辻口 徹 (ルリ子の兄) 陽子が本当の妹でないことを知ってから、異性として愛するようになる。

ルリ子 (3 歳)

通りすがりの日雇い人夫「佐石土雄 (さいし つちお)」に扼殺(やくさつ)される  
(昭和 21 年 7 月 21 日) (徹 5 歳)

佐石は留置所で自殺、女の子は、高木が囑託をしていた乳児院へ預けられる 陽子？  
お手伝いの次子

村井靖夫 (辻口病院の眼科医)

松崎由香子 (辻口病院の事務員) 啓造を密かに愛する。村井に犯される。

「院長先生の子供を産みたかった」と言って、失踪。盲人になる。

藤尾辰子 (夏枝の友人、日本舞踏の師匠)

高木雄二郎 (学生時代からの啓造の親友、札幌の産婦人科医、乳児院の囑託兼任)

陽子 三浦綾子の妹「陽子」(6 歳と 2 日で死亡) から名前を取ったという。

佐石土雄の娘として辻口家にもらわれてくるが、実は、高木の友人三井恵子が夫の出征中、中川光夫との間に生まれた子。三井恵子は、夫が帰還して小樽に在住

夏枝から、小学生の時「首を絞められて殺されそうになったり、発表会の洋服を作ってもらえなかったり、また、答辞の原稿を白紙に替えられたりしたが、最後に、佐石の子であると知らされ、カルモチンで自殺をはかる。

陽子助かるのか？ (「氷点」終わる) 「続氷点」一命を取り留めることから始まる

北原邦雄 (大学生の徹の友人) 陽子に思いを寄せる。陽子も。

夏枝、北原、陽子の前で、陽子の出生の秘密を暴露。陽子自殺を計る。

津川教授の言葉（学生に語った言葉）

「君達はドイツ語がむずかしいとか、診断がどうだとかいいますがね。わたしは、何がむずかしいとって、キリストの”汝の敵を愛すべし”という言葉ほど、難しいものは、この世にないと思いますね。たいていのことは努力すればできますよ。しかし自分の敵を愛することは、努力だけじゃできないんですね。努力だけでは……」

敵というのは、憎らしい人のこと。意地悪したり、いじめたりする人のこと。仲の悪い人。  
敵とは、一番仲良くしなければならぬ相手？

辰子：「もし百円落としたら徹くんはどう思う？」

徹：「損したと思うさ。当たり前さ」

辰子：「陽子は、どう思う？」

陽子：「百円落とさないで、わかんないけれど、ずっとせんに十円おとしたの」

辰子：「その時どう思った？」

「だれかが拾って喜ぶだろうと思ったわ」

「だれかが拾って喜んだら、つまらない？」

「だれかが喜んだらうれしいわ。乞食が拾えばいいなあと思ったの」

「だってさ。落としたら損だぞ。うれしくないよ、ぼくは」

「徹くん。十円落としたら、本当に十円をなくしたのだから損したわけよ。その上、損した損したと思ったら、なお損じゃない」

「あ、そうか」

「百円落としたら百円分楽しくするのよ。二百円落とさずに百円だったからよかったなと思ってもいいしね。あの百円拾った人は、もう死ぬほどおなかがすいていて、あの百円のおかげで命が助かって、それからだんだんいいことばかりあるんだと思ってもいいさ。百円落とした上に、損したといつまでもクヨクヨしていたら大損よ」

「フーン。足をケガしたら、手はケガをしなくてよかったと思うのかい？」

「そうよ」

陽子、第 13 回卒業式（中学）総代に選ばれ「答辞」を読む。夏枝、奉書紙を白紙と取り替える。

「実はただ今、答辞を読もうと思いましたが、これは白紙でございました。」

「どこでどう、間違いましたか、私にも分かりません。けれども、これはとにかく、私の不注意であることは、確かでございます。ご来賓の方々。先生方。在校生のみなさま。そして本日晴れの門出をなさる卒業生のみなさま。私の不注意を何卒おゆるしになって下さいませ」

「みなさま。ほんとうに、私の不注意を心よりお詫び申し上げます。私といたしましても、何日もかかって書きました答辞が、まさか白紙になっているとは夢にも思わないことでした。それでただ今は少しばかり驚いたのでございます。」

「このように、突然、全く予期しない出来事が、人生には幾度もあるのだと教えられたような気がいたします」

「自分の予定通りに出来ない場合は、予定したことに執着しなくてもよいということも、

私はただ今学ぶことができました。それで、勝手なのですが、ただ今予定外の行動をとらせていただきました。雲の上には、いつも太陽が輝いているという言葉、先生に教えていただいたことがございます。私は少し困難なことにあいますと、すぐにおろおろしたり、あわてたり、ベソをかいたりいたします。けれども、それはちょっと雲がかかっただけで、そり雲が去ると、太陽がふたたび輝くのだと知っておれば、私たちはどんなに落ち着いて行動できることでしょうか。今日わたくしはそれを学ぶことが出来て、よかったと思います。私たちは、中学を卒業致しますと、進学する人、就職する人の別こそありますけれど、一步、大人の世界に近づくことでは同じだと思えます。

大人の方々の前で失礼ですけれども、大人の中には意地の悪い人もあるのではないかと思います。でも私たちは、その意地悪に負けてはならないと思えます。どんな意地悪をされても困らないぞという意気込みが大切だと思うのです。泣かせようとする人の前で泣いては負けになります。その時にこそ、にっこり笑って生きていけるだけの元気を持ちたいと思えます。このこと一つだけでも、私たち卒業生の一人一人の心の中にあるならば、今日お祝辞を下された方々、先生方、また仲良くして下された方々への御礼になるのではないかと思います。...しどろもどろでつまらないことを申し上げましたが、これを以て第13回卒業生一同を代表致しましての答辞と致します。」

北原の手紙 「大いなるものの意志」

陽子：「この世には人間の意志をこえた、もっと大きな意志があるような気がする。でも、それは運命ということとも違うわ。どこが違うのかしら」

徹と秘密を知った陽子の会話より

「でもね、そこが私のひねくれたところかも知れないわ。本当のお母さんに会ってほめられるようないい子になろうと、はじめは一生懸命だったのよ。中学に入ってから、よく新聞で非行少年とか少女とかがって記事が出ているでしょ。両親がいないからとか、片親だから、継母だからとかがって、ひねくれてる人間がザラにいるでしょ？ でも、わたしはね。そんなザラにいる人間の仲間入りをしたくないっていう生意気さがあったの。自分が悪くなったのを人のせいにするなんていやだったの。自分が悪くなるのは自分のせいよ。それは環境ということも確かに大切だけれど、根本的に言えば、自分に責任があると思うの。

陽子ね。石にかじりついてでも、ひねくれるものかというきかなさがあるの。層雲峡に来る時、石狩川の上流がきれいだったわ。下流は工場の廃液で黒く汚れているけれど、あれをみても陽子は思うのよ。わたしは川じゃない。人間なんだ。たとえ廃液のようなきかないものをかけられたって、私は私本来の姿を失わないって、そう思ってたの。こんなの、やはり素直じゃないわね、おにいさん」